

あんぜんの 安全

あかりとあかし

月一回ないし二回刊行予定
創刊前に数回準備号を発行します

準備号 2

05/1/30

- | | |
|----|----------------|
| 1面 | 解題<あかりとあかし> |
| 2面 | 今後の活動、前号の要約、訂正 |
| 3面 | <をにが問題> |
| 4面 | お願い、所在地、編集後記 |

NPO法人 安全学研究所 〒190-0012 立川市曙町 2-42-23 ア-バンライフ立川 614
Organization of HOLONOMY Tel -Fax 042(521)2988
Email: holonomy@aa.bb-east.ne.jp
URL: <http://enjoy1.bb-east.ne.jp/~holonomy>

<安全のあかりとあかしの解題>

あかりとあかし 2

安全学研究所の法人としての新しい発足に当って、前号では、安全の「あかりとあかし」についてまづ述べました。本来ならば「安全」についての説明を先にすべきだと思われるのにそうはしなかったわけですが、そのわけは安全については殆どの人がそれなりにわかったものとして、特に問題を感じることもなくやりとりしているのが普通だからです。

わたし達も、特に改まってこの言葉についてその意味を正すことがなくとも、少し馴れればそれなりに一応の理解がえられ、興味も深まるだろうとの期待をこめ、唐突な感じの伴う「あかり」や「あかし」について、そしてまた急にはピンと来ない、しかしながら安全学研究所の今後について基本方針の理解に必要な両者の関係について、その説明の途中で必要な他の語の解説をも加えながら、述べてゆくことからはじめたものです。

そして、その説明がとりあえず一段落したところで、世間では浅く安っぽく曖昧にしか捉えられていない安全についての少しばかり本格的な説明に入ろう、入れるだろうと考えたのです。安全について「あかり」とか「あかし」とかいわれても何ともしようがないだろうと思われたからです。

人によって安全学については耳にしたことがあるかも知れませんが、私達が考えるような文字通りの十分な意味での「安全」の理解はないまま言葉だけが、このように広まってきたのはごく最近のことと言えます。殆どの方は安全科学止まりの知識であって、安全学となると始めて耳にするのだらうと思われます。目にし耳にしたことのある人にしては恐らく安全についての「学」的考察にもとづいた反省的批判とは全く無縁といってしまうでしょう。安全についての不確かな常識的というか通俗的というか、その理解にもとづいた「安全学」であれば安全のあかりとあかしと言われても何とも理解に困るでしょう。

例えば交通の安全とか食品の安全とかいっても、そもそも「安全」ということはどういうことなのか、あまりよ

くわかっていないのです。交通の安全はよくても食品の安全というのは全くよくない言い方、むしろ誤りというべきものだといっても何故そうなのかわからないでしょうが、そのことは後にどこかで述べることにします。安全といっても具体的にはいろいろな違いや片寄りがあるばかりでなく、とんでもない勘違いを持ち込んで問題をねじまげてしまうことが多いのです。片寄りや間違いを避けるためには、突っ込んだ反省的考察が必要となります。

実際に 1986 年に辛島恵美子の『安全学索隠』が書かれるまでは、「安全か危険か」というのが、安全を問題にする際に普通の定式的第一声でした。その基本的理解では安全と危険は二者択一的に相反していて、安全ならば危険でない、危険ならば安全でないというものでした。そこで前号、根本的な「安全」の言葉の意味、難しく言えば概念の正しくまた十分な理解のためにも、「あかし」は理論的な説き明かしと実地の実効性の明示であること、そして「あかり」は二つの「あかし」の間にあること、そして「あかり」の方が安全学研究所の新たな、しかし常に広く人間の実践活動の変らぬ中心になるものだということを述べたのでした。

しかし、終りのない「あかり-あかし」の連鎖の中で切り取り方を変えれば、言葉の説明、理論的的原理的説明に終わってしまったために前号ではそれ以上の附言、つけ加えまでは展開しませんでした。が、「あかし」は前後二つの「あかり」実践の間にある正しい認識やそれにもとづく姿勢や態度形成もしくは決定のための思考によるものとも考えられます。前のあかり行為の反省であり後の増(?)しなあかり行為の「寄る辺」となるものなのでもあります。

同じ「あか」にそれぞれに「る」か「す」の連用形がついた「あかり」と「あかし」の関係については、河原氏の寄せられた意見とすり合わせながら別項(『をにが問題』参照)に移して述べることにしましょう。<次号へ>

法人化した後の活動の基本について

安全学研究所は、財団法人の設立準備会を重ね、日本経済のパブル崩壊時に頓挫してしまっただけ前歴がありますが、諸般の事情を斟酌加味し、持続してきた活動を拡大発展させるべく、NPO 法人として(2004年10月7日東京都承認)、新展開をすることになりました。

現実の安全の問題の解決という問題に十分に対処するため、また本来的に実践的な学である安全学理論の整備拡大にも資するために、従来の理論的な活動に止まらず、特定非営利活動法人として、実践活動へも活動を拡大し展開することになりました。

今回の NPO 法人化によって、純粋な研究活動の外にも実際の問題にも今後ひろく活動できることになりました。

「解題 あかりとあかし」1号の具体的要約

当研究所の活動の基本形を示せば、あかり的活動とあかしの活動に分られ、経済活動でいう $G - W - G' - W' - G \dots$ (G は金銭、 W は事業) のように、【あかし(安全や安全問題の真義理解)】 【あかり(理論にもとづく実践活動)】 【あかし(実践活動の反省・経験の理論への反映)】 【あかり(改善された実践)】 と進めることとなります。

このパンフレットもあかり的役割とあかしの役割の二つを担うこととなりますが、交替刊行か、少なくとも焦点を交替させての編集「あかり」中心版と「あかし」中心版がよろしいかと思われませんが、

実践部門に応じた 安全のあかり としての便りは、安全活動を行いながら、また安全問題の正しい知識・理解の普及をもめざす内容のものとなり、

理論部門に応じた 安全のあかし としての便りは、理論を展開し、実践が、1) 現実的であって、空論でないこと。

2) 真の安全理解に根ざし、目的を明確に表明できることで批判と批判受容を可能にし、他に説明し理解をもとめながら独断に陥ることを防ぎ、他からの評価、批判に耳をひらくようにすることをめざすものとなります。(ご意見をお聞かせ下さい。)

前号のあかりとあかし欄の誤植訂正

(p2) 右欄第一段落 9行目:(誤)「立ちもとほりながら」 (正)「立ち徘徊(まち)りながら」
同 二段落 5行目:(誤)「証は燈の新体字として」 (正)「証は燈の新体字として」

今後の活動について

今後はできるだけ早く実現したいと思っておりますが、上欄のように要約できる前号所載の従来からの理論的研究に加えて、今後展開予定している実践的活動について要点だけを取上げて記すことにしますと、次のようになります。

(1) 安全問題の基礎に関する資料情報センターの運営をめざします。

安全問題への取り組みの向上には、とくにひろく、さまざまな分野の専門家や行政や市民の活動に関する記録や基本的文献の収集が肝腎なものとなります。したがって私たちの場合は、安全問題に関する情報収集を行い、とくに安全学的視点を加えて、ひろく活用できるようにデータ・ベース化したいと考えています。それをインターネットも含めた様々な手段での利用をはかり、多くの皆様のご協力をえて情報交換のネットワークをつくりたいと思っております。また新たに生じてくる安全問題についても積極的に情報提供をしてゆきたいと考えています。

(2) 安全問題に具体的に取組む活動を支援します。

個々具体的な安全問題の知識や技術が蓄積しつつありますが、問題の根本に関わる基礎的な理解に混乱や誤りがあって、解決を妨げていることもしばしば見受けられます。このことに鑑みてわたし達は、安全問題の基礎に関するコンサルタント・サービスを行います。

(3) また、将来は、資金との関係もありますが、広く正しい安全概念と安全学を基礎にした安全関連の研究に対して財政支援等を含む助成を行えるようになりたいと考えています。

ミニ辞典 safe や secure は「安全」という言葉を用いて訳されますが、safe はその動詞 save が「無くならないように、つまり無駄になつたり無化したりしないようにする、或いは危難から救う」意味で、名詞は「やっと事無きをえる、無事であること」或いはそのための予防的手段として「金庫」にもなります。

安全保障は security ですが、動詞 secure は「なにが確保しがたいもの、放っておけばなくなってしまうものを獲得する、或いは確保しておくことやその仕方」です。両語とも、目前の対象物にかかわる行為をいう言葉で、日本語の「安全」のように安んずるための「全」を視野にいれえず、したがって行為主体の全を問題対象に据えるような意味にはなりえません。safe や secure には個別具体的な手段や問題にかかわる以上の期待はできないといつてよいでしょう。そんなときは日本語のままの Anzen もしくは Holonomy の語を用いてゆくべきでしょう。

この欄では、「を」の誤用を取り上げて助詞の誤用もしくは日本語文法の根本的誤解について検討しようというわけですが、前号の文に対して、さっそく河原修一先生よりご意見を寄せていただきましたので、予定を少し変えて用意の論稿に入る前に、先生の御説のうちから一部をご紹介しますながらその助けを借り、論をすすめて行きたいと思います。

『……（前略）……「をにが問題」に関するエッセイも興味深く読ませて頂きました。

実は、喪中のはがきを印刷所に頼んだときに、担当者が持ってきた例文には、「ご厚情を深く感謝いたします」とあったので、『国語用例辞典』のなかの例文を示して、「ご厚情に深く感謝いたします」ではないかと指摘しましたところ、担当者も驚いて例文を訂正しておりました。……（後略）……』

感謝するというのは「心に感じてお礼の言葉をのべる」ことだと思いますが、「感」は自らの心に何らかの情を感じること、「謝」は詫びを入れて謝^{あやま}るだけでなく、「謝礼」のように礼をのべたりすることでもあります。一語に合せた「感謝」は自らの情^{こころ}を相手に述べ伝えることです。当然、今日ではもっぱら「詫び」をいうことでない方に限られていることは言うまでもありませんが、その場合の「感」は、詫びるような場合にしても感謝する場合にしても、なんとなくぼんやりとではなく、強く感じ動かされ、その情感に感応して言葉や行動に表われざるをえないというものでしょう。感謝は感じて謝する、即ち分解すれば（相手の）「厚情に感じ」入り「相手の厚情を謝する」ことになるわけです。この言い方は「知東京都事」の類いの官職を今日まとめて「知事」としているのと併せ考えてみればよいでしょう。

少し詳しく言い直せば、「あなたの厚情に感じて、厚情をお寄せ下さったあなたに謝します」となります。相手の厚情に「感謝する」つまり感じて相手に謝するのは確かに私ですが、「相手に」でしょう。しかし、相手そのものというよりむしろ相手が厚情をよせてくれていること、したがって「（相手の）厚情に」、言い直せば「厚情を寄せて下さった相手もしくは相手のこころに」でしょう。感謝は相手に向けられた謝意ですが、謝意を示す由縁を「を」として示すよりも、厚情を受けとめるこころに感（謝）が生じたということが先行していることが辞に表れるべきです。相手と相手のそのときの厚情とを切り離して「厚情を」と「を」を使って、ケチケチと限定的に言うのはどういうものでしょうか。

「を」といえば相手のまるごとではなく、特定の点についてだけは感謝できるという意味合いが生じかねないのに対して、「に感謝する」は相手に感謝する由縁となった所以のポイントを「に」で示しているのであって、勿論謝辞を伝える相手は言うまでもなく相手です。

英語の構文に引き当てて考えてみましょう。いわゆる SVOO の第四形式の文にするにしても問題は大きいというべきですが、とにかく実質 SVO 形式としてみれば、もっとよくわかります。I thank you for your kindness.さらには I am deeply grateful to you for your kindness. を考えてみれば、「を」を用いて「御厚情を感謝する」とするよりも「御厚情に感謝している」ことを示すととる方が真情を伝えるのに相応しく、また for や to の意に適い、特に日本語の「感謝」の言葉にふさわしいのではないのでしょうか。直接目的は「に」と訳されるべきで「を」と訳されるべきでないのです。間接目的は「あなたの」と訳されるべく、「私はあなたの厚情に感じ、あなたにその気持ちを伝えたい」というように、誰のためという関与や感情を示すのです。「あなたに（感）謝します」ということを、もし「あなたを（感）謝します」とやってしまったら、「靖国神社を参拝します」と言って靖国神社に参って靖国に坐す「神」を拜まず「神社」を拜むということになるのと同じです。

「感謝」というとき、単に行為を述べる前に、感じている感情^{こころ}の様を示すことが「謝」の行為の前にある筈です。口先や文面でいわゆる「気持ち」を伝えることとなる筈ですが、今様の感謝は「感」よりも「謝」に意味の重点がずれてしまっているのです。ですから、「感謝しています」という代りに「感謝します」ということになってしまったのです。これは「思っています」と言わず、何か偉そうに「嬉しく思います」といってしまう誤りに通じます。これから心を決めて思うことにしているとも受け取られかねないこととなります。感謝というのは感情事実なののでしょうか、単なる礼法上の行為なののでしょうか。即ち感謝状態をのべる形容的状态名詞であり、それに「する」がついて行為動詞となるのですが、私の情の状態をいう言葉ととるか、私の行為ととるべきかの問題です。

理事・監事紹介

小堀 樹氏 : 弁護士。元日弁連会長で、現在も広く活躍中。

津熊二郎氏 : 東農大卒の広い関心で世の中のこと、人のことを見てこられた一般的サラリーマン。奥様は高校の先生。

辛島恵美子氏 : 多角的な領域にわたって、論文・著作、翻訳や講演、討論などを通じて安全の本義を説く活躍をつづける。
現在、青山学院大、秋田大、東工大の学部、大学院などに出講。

石上麟太郎氏 : 指導的役割を演じている大崎先生率いる八重洲法律事務所気鋭のパートナー弁護士。

ご協力ご参加のお願い

東京都生活文化局によるアンケート「悩みを抱える青少年を支援する特定非営利活動法人の実態調査」に答えました。

当研究所としては、個人的な生活に密着した問題についても、従来のような理論的研究のほかに実践問題にまで幅を広げるとすれば、それなりの新しい活動を維持するために費用、労力が大きくなることとなります。また本格的活動にいたっておらず、助成は勿論出版など活動自体から収入のえられない過渡的段階ですので、やや過大な負担を負い、またお願いするような次第ですが、ぜひ、会員として、またこのパンフレットへの投稿その他いろいろな形での有志の方々や活動中の方々の参加や援助・ご支援をお願いいたします。

新しいこの研究所で、揃って一緒に第一歩を踏み出していただける方々の参加を心からお待ちしております。従来、安全問題に関心をおもちで活動している方にはその経験を持ち寄っていただければありがたく、またとくに安全問題に関して活動をしたことのない方も興味をおぼえ活動してみたい方もぜひご参加ください。

今後の参加者の増加によって過大な負担を軽減しながら、皆様の経験によるご意見やご忠言、ご叱責によって様々に改善の工夫、努力をして参りたいと思っております。

遅れておりましたホームページは何はともあれ取り急ぎ、開設の予定です。

***** 編集後記 *****

河原修一氏は県立島根女子短期大学の教授で、英文学ののち国文学を専攻されて、『日本語心象表現論』という大著を物されていますが、安全のあかりとあかし(これからは文面では「安全燈」とでも略しましょうか)に感想を送って下さいましたので、この了解をいただいて掲載し、これに説明を付け加えて安全理解の助けにさせていただきました。河原氏の外にも、いろいろな人からお気持ちをいただきましたが、今はご参加いただける状況にない方でも、ご意見を寄せることからご協力いただければありがたいと思います。

今号ではあかりとあかしの文の流れの中の、その一部を切り離して言語論である『をにが問題』の欄に載せることになりましたが、問題が連なり合い絡み合っているからそうすることになりました。ところで、事柄を細分して取り上げるのは全く便宜上のことですが、まるで別々のものと考えパラバラにしてしまうのはごくごく普通にみられることですが、恐ろしい誤解のもとともなります。科学は物やことの精確徹底的な検討のためには欠かせないものであり、実際に今のような技術の大きな進歩をもたらしてくれましたが、もともとの全容の全体的な問題、現実の現象的問題、そして少し難しくいえば本質理解と価値としての意味を敢えて取り落としてそのままに、現象し現成(ゲンゾウ)している本来の問題や物事を分らないものとしてしまうのです。

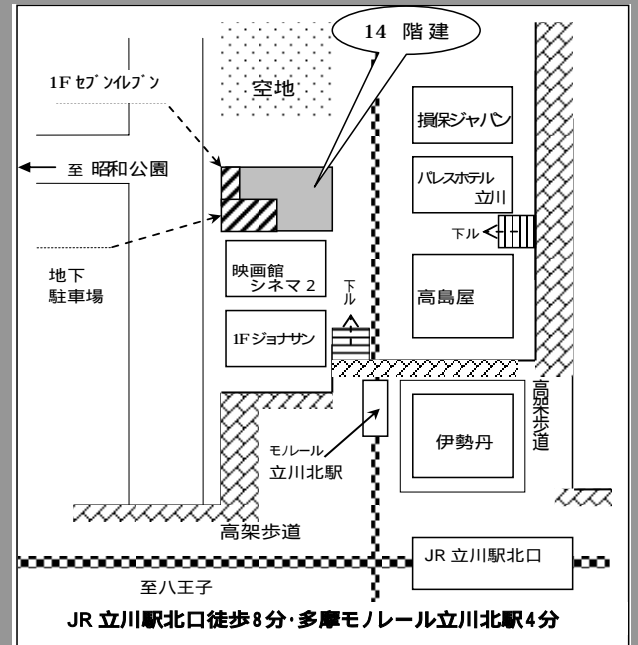
本当の問題とその解決は何かと反省し、本題を取違えたままの見当違いにならないよう、くれぐれも気をつけなければなりません。それには一知半解の半端学者の主張に惑わされた見当違いのままの実践が多すぎるように思いますが、批判力と批判の姿勢と態度が必要です。

その都度の反響を取り入れ、皆様からのご意見を優先的に扱いながら紙面を構成してゆきたいと考えております。

解題<安全のあかりとあかし>と<をにが問題>は、それぞれ今後何号かのために400字×20枚ほど原稿を用意していますので「あかしとあかり」欄「をにが」欄と呼び、今後長く続ける予定ですが、日曜は毎回10時から勉強会を開くことになっていますので、質問が沢山ある方は直接お出かけ下さい。

内容量の多いものでなく、もっと気軽に読める号があってもよいだろうとも考え、今号は大きな字を心がけました。なかなかスムーズに進みません。できるだけ早く2回出すことができるようにしたいと思っています。前号で予告した「嫌いなもの 地方という言葉」の掲載は見送りましたが、今後一気読み物として早急に開くホームページにすっきり譲ることになりました。ご期待下さい。(M.S.;N.N.)

所在地



現在の暫定的会費 (単位:円)

	入会金	月会費
正会員	12,000	3,000
賛助会員	一口 10,000	4,000
学生会員	1,000	1,000